2025年3月

山添村古文書調査だより

奈良大学文学部史学科研究チームと山添村教育委員会による共同調査・研究

2025年3月4日（火）～5日（水）の2日間にわたって、山添村教育委員会のご協力で古文書調査を実施することができました。奈良県山辺郡山添村での古文書調査は、10年目となり、今回で20回目となりました。

調査場所として山添村生涯学習施設 東豊館（東豊ベース）を使用させていただきました。

整理したのは、作業が途中になっていた勝原区有文書と葛尾観音寺文書、新たに借用した葛尾の濱田家文書です。

勝原区有文書は、近代文書が中心でした。

観音寺は、真言宗の御室派に属する寺院です。今回は前回未調査の史料を借用し、整理することになりました。

今回の調査で目をひいたのは、「光明満（曼）荼羅」と軸裏に書かれた江戸時代のものと思われる仏画です。中央に梵字で光明真言とともに、大日如来などの五尊を描くものです。興味深いのは、上段に二十五菩薩の来迎図、中段に四天王、下段には不動明王と真言八祖が描かれているところです。光明曼荼羅で、こうした構成になっている作例は珍しいのではないでしょうか。軸裏には「両葛尾無常用」と記されていることから、あるいは葛尾村で葬儀が行われる際に使用されたものかもしれません。

このほか、近世の涅槃図、三千仏（千体仏の三幅対）も確認できました。

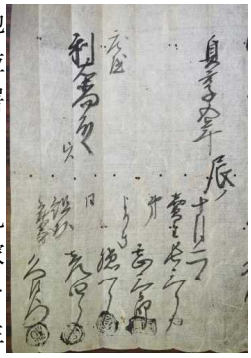
なお、箱書きや濱田家文書から、涅槃図は観音寺の子院であった不動坊の什物だったことがわかります。不動坊が廃寺になった際に観音寺に引き継がれたと思われます。

観音寺は、近世に家野で生まれたとされる鑁海上人が建立したと言われています。涅槃図を収納していた箱の蓋と思われるものの裏面には「大和州山辺郡葛尾邨金輪山観音律寺鑁海院子院　不動坊常住物」（傍点は筆者）と記されており、観音寺は開山僧の名前をとって鑁海院と称していたようです。鑁海上人は寺の裏手で寛保 2 年（1742）に入定したと伝えられています（三重県立名張高等学校郷土研究部編『なばりの昔話』続、三重県立名張高等学校同窓会、1984 年）。

このほか、寺院関係の文書だけでなく、葛尾区で作成保管されていた近現代の公文書も多数含まれており、内容ごとに簿冊にまとめられていました。そのなかには、明治期の史料も綴じ込まれており、葛尾地区の歴史を知る上で貴重な史料になると思われます。

今回、初めて調査させていただいた葛尾・濱田家文書は、葛尾村庄屋をつとめていた家で、同家の濱田潤一郎氏は 1956 年に添上郡東山村と山辺郡波多野村・豊原村が合併して発足した山添村の初代村長でした。

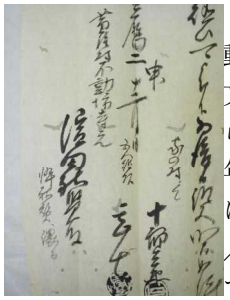
濱田家文書は、17 世紀から近代までの史料があります。近世文書の多くは、金融や田地などの売買に関わるものでした。



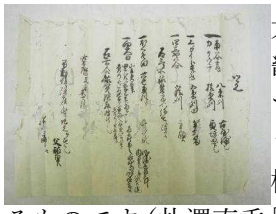
特筆すべきは、貞享 5 年（1688）10 月 2 日「永代売渡し申田地之事」に売主・弟と並んで「よりき」2 名が署名している点です。

「よりき」（与力）とは、大和高原地域で見られる民俗慣行で、家と家が「与力関係」を結び、冠婚葬祭など生

活の場で互いに協力しあうというものです。与力制度については、早くから社会学の分野では知られており、研究蓄積もあります（三上勝也・山本毅雄『与力制度と村落構造－大和高原村落の社会学的研究―』多賀出版、1985年）。とはいえ、こうした慣行が17世紀にまで遡ること、さらに家族や村役人とともに売買の際に連署する、つまり売買に責任を負うような関係であったことが史料で確認できたことは非常に重要だと思われます。



また、観音寺の子院不動坊についても、濱田家文書から新たな事実が明らかになります。宝暦2年（1752）12月「証文」には「葛尾村不動坊寺元／濱田祐賢殿」と書かれていました。「寺元」とは、

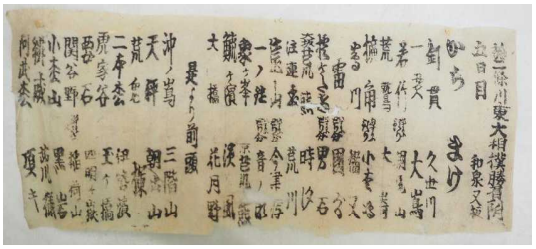


大和国をはじめとした畿内で見られる慣行で、寺院に子弟を入寺させたり、住職の任免権を特定の家が保有するものです（朴澤直秀「寺元慣行をめぐって」『国立歴史民俗博物館研究報告』第112集、2004年）。

この前年、宝暦元年には祐賢は「不動坊へ隠居」していたことがわかります（宝暦元年10月「覚」）。もとは、濱田家の隠居所として営まれた寺庵だったのかもしれません。

その後、明治7年（1874）・24年（1891）には伊賀国岡波村で生まれた浜岡俊照(智明)という尼僧が住職を務めていました。しかし、大正11年（1922）には「建築物ナシ、坊名存スルノミ」という状態になっていたようです（「財産並収入申告、宝物什器届書」）。その後、不動坊にあった涅槃図などは、観音寺に移されたのでしょう。濱田家と観音寺、不動坊との関係なども、今後の調査が進んでいけば、さらにさまざまなことが明らかにできるのではないかと思われます。

このほか、珍しいものとしては京都の二条河原で興行された相撲の勝敗を伝える瓦版もありました。



今回も日帰りのため作業時間は少なくなりましたが、参加学生のみなさんの努力により、調査は順調に進捗しました。

勝原区有文書は、箱10～15に加えて「箱番なし」の6点、すべての整理を終えました。今回の勝原区有文書でとったカードは231点となりました。

葛尾観音寺文書は、箱4～6の作業を終え、箱7は作業途中となり、総計48点。葛尾・濱田家文書は箱1が1～83（作業途中）で計83点。2日間で合計362点のカードをとることができました。

調査参加者は、本学学生有志延べ42名（4日は21名、5日は20名）です。こうした古文書の整理作業は初めてという1年次生の参加もありましたが、次第にくずし字で書かれた古文書を読み、カード化する作業にも慣れてきたようです。

教員は、河内将芳、木下光生、外岡慎一郎、森川正則、村上紀夫の4名があたりました。

山添村での調査は今後も継続していきたいと考えています。調査にあたって便宜を図って下さったご所蔵者と山添村教育委員会の皆様にお礼申し上げます。